

小学校外国語科におけるパフォーマンス課題と

評価の在り方に関する研究

尾上 利美（和歌山大学教育学部）・清水 奈穂実（海南市立亀川小学校）
井戸 壮太（海南市立亀川小学校）・山下 千香（海南市立中野上小学校）
辻本 隼也（海南市立大東小学校）・山本 恵子（海南市立大東小学校）

1. 研究課題について

本研究課題は、海南市立教育研究所「外国語科に関する研究部門」に所属する先生方がこれまで進めてこられた効果的な指導法および評価の方法についての研究を、さらに深化させることを目的として授業分析や会合等を計画・実施することであった。

2. 取り組みについて

新型コロナウイルス感染症対策にともなう学校の長期臨時休業等から、共同研究者の先生方の会合へ研究代表者の尾上が実際に参加することができたのは、以下の日時のみである。

<令和2（2020）年11月27日（金） 14：40～（@海南市立大東小学校）>

2020年4月より全面実施となった5・6年生の外国語科の円滑な授業実施のために、これまで共同研究者の先生方が作成してこられた「Can-doリスト」、『NEW HORIZON Elementary English Course』（東京書籍）の各ユニットの「評価規準例」と「かんたん早見表 外国語評価場面」、および各学校で実施された「英語についてのアンケート」の結果についても説明をいただいた。また、研究代表者の尾上の方から、資料をもとに単元と授業づくりおよび評価についての話をさせてもらい、その後、意見交換を行った。



3. 海南市立教育研究所「外国語科に関する研究部門」の清水先生からの報告

1) 海南市立教育研究所の概要

昭和55年に各種テーマを掲げ、1期2年間を研究サイクルとして本研究所が発足した。平成24年度からは、海南市全体に関わる教育課題を研究する「共同研究部門」と個々の力量向上を目指した「個人研究部門」の2部門を設置し、教育の向上を図る事を目的に実践研究を行っている。

「外国語科に関する研究部門」は、令和元年 11 月に発足し、2 年間の研究指定がされている。令和 2 年度から小学 5・6 年生で教科として外国語科が始まるタイミングでの研究である。研究テーマは「外国語を通して、自分の考えや気持ちを伝えることを楽しめる子の育成～Today's Goal とルーブリックの明確化による主体的な学びの育成～」とし、取り組みをはじめた。しかし、「小学校外国語科におけるパフォーマンス課題と評価の在り方に関する研究」という上記テーマの部分が自分たちで進めるには、あまりにも分からないことが多く手探り状態であったため、和歌山大学教育学部の尾上先生に共同研究を依頼し、助言をいただきながら研究を進めることとなった。これは、海南市立教育研究所としても大学と共同研究の形態を取るのは初めてのことである。

2) 海南市立教育研究所としての研究経緯

(1) Can-Do リストの作成

学年及び領域ごとの学習到達度目標を Can-Do リストに整理した。同時に、今年度からの教材の単元ごとの評価領域（評価場面）もリストに整理した。

(2) 評価規準表の作成

資質・能力の 3 つである知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度と「内容のまとまり」である 5 つの領域「聞くこと・読むこと・話すこと [やり取り]・話すこと [発表]）・書くこと」ごとに分けた評価規準を作成した。作成するにあたって、評価項目を全 Unit(単元)で全て記載すると結局何を評価してよいか不明瞭な表になると考え、Unit ごとで、どの領域に重点を置いて評価するか、「記録に残す評価」を指導者が一目でわかる表にした。

(3) 児童アンケートの作成・アンケート実施・集計・分析

作成した Can-Do リストやルーブリック、またそれらをもとに計画した実践の有効性を実証するために、自分の考えや気持ちを伝えることを楽しむことの意識についてアンケート調査を行った。今回の実践では、文部科学省による「平成 26 年度 小学校外国語活動実施状況調査」を参考にして、アンケート項目を作成した。アンケート対象は、共同研究員が関わる小学校の 5、6 年児童で、アンケート形式は、質問項目に対して選択式で回答するものとした。実施時期は、実践導入前の 6 月と導入後の 3 月の 2 回である。6 月の結果と 3 月の結果を比較し、導入前と導入後の変化について分析していく。

(4) 授業実践・研究授業の実施及び検証

① 毎時間の授業実践（中野上小学校）

授業は、第 5 学年と 6 学年で実践し、作成した Can-Do リストから単元計画を立て、振り返りシート・パフォーマンス課題・ルーブリックを作成した。特に第 6 学年の授業においては、教員と児童が一目で理解できるようイラスト付きの「児童用 Can-Do リスト」作成、配布した。英語科のファイルに貼り、5 領域の目標を随時確認できるようにした。「教材の英語表現など、全ての英語を理解しなければ

ならない。」「英語を全て聞き取り、書けないといけない。」と思っただけで、「全部わからない自分は駄目だ。」と英語の学習を負担に感じていたり、英語を「嫌い」と感じる児童が多くいることがわかった。そこで、Can-Do リストを提示し「卒業するときには、これができるようになる。」と目標をもたせるようにし、学級全体で随時確認した。その継続的な取組の中で、「Can-Do リスト」、「ループリック」、「振り返りシート」を基に自分自身の学びを高めようと意欲的に取り組んでいる様子や自己の課題を振り返っている児童の姿を観察することができた。

6年生 Can Do リスト				
聞くとき	読むとき	友達とやりとりするとき	発表するとき	書くとき
身の周りの簡単なことについて				
目 イラストや写真を参考にしながら、今までに学習した簡単な言葉や表現を使って				
標 				
短い会話や説明などの だいたいの内容を 聞き取ることができる。	パンフレットなどから 必要な箇所を探したり、 簡単な表現の意味が読み 取れる。	学習した表現を使って、 伝え合ったり、短い会話 ができる。	相手にわかりやすく 伝える工夫をして発表 できる。	別紙を見ながら、 表現したいことを 正確な日本語で書ける。

② 提案授業：小学校 6 年生外国語科「亀川中学校の英語の先生に自己紹介をしよう」

(亀川小学校・R2. 8. 21 実施)

<授業概要>

「外国の人にメッセージをつたえよう」という 2 時間扱いの『話すこと（発表）』の単元を、実際に中学校の英語の先生に小学 6 年生が英語で自分の事を伝えるという課題に変更した。児童には、1 時間目に Today's Goal とループリックを提示し、児童が既習表現を使い自己紹介の準備をした。2 時間目は、1 学級 35 人を 2 グループに分けた少人数指導の形態をとり、1 つのグループは中学校の ALT ジャスミン先生に、もう 1 つのグループは英語の授業を担当している教頭先生に発表を行った。その発表を小学校教諭が観察し、小中両教職員がパフォーマンス評価 (PA) を行った。

<研究目的>

- I ループリックを明示することで児童の主体的な学びが実現するか。
- II 自己評価における Today's Goal の達成率は何%か。

<考察>

I について：ループリックを明示したことにより、1 時間目の発表準備の段階で、B 評価ではなく A 評価を目指す児童が 9 割に達した。特に、発表文を 4 文以上にし、質問文を加え中学の先生が答えてくれた後にどう反応しようかと具体的な場面を想定して発表準備に取り組んでいた姿が印象的であった。また、家で発表の練習をしてきた児童が何人もいた。暗記するという項目はループリックにはないが、暗記することで先生の目を見て発表できるようになりたいという理由で暗記してきたようであった。このように、ループリックで示された姿を目指し、主体的に取り組んでいる姿が見られた。

II について：児童のワークシートの自己評価の回答結果より次のようなことが分かった。

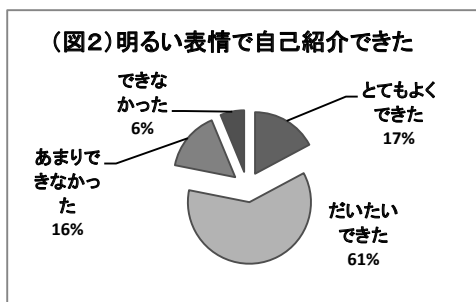
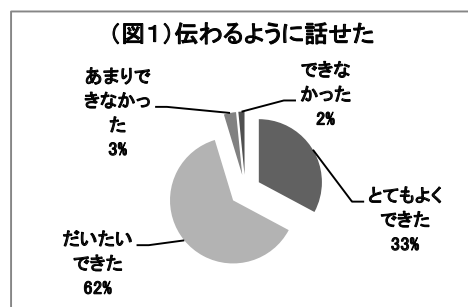
(ア) 知識・技能について (図1)

設問1「中学校の先生に伝わるように3文以上話せた」の自己評価B以上(とてもよくできた・だいたいできた)が95%に達した。

(イ) 主体的に取り組む態度について (図2)
設問2「目を見てゆっくり話し、明るい表情で自己紹介できた」の自己評価B以上(とてもよくできた・だいたいできた)は78%であった。

この2つの結果から、ルーブリックが主体的な学びの実現に一定の効果があったと考えられる。しかし、知識・技能のルーブリックに比べ、主体性についてのルーブリックの表現に曖昧さを残していたため達成率が低くなったと考える。

また、児童の自己評価の記述から児童にとってキャリア発達において効果があった事がわかった。小学校6年生にとって中学校の先生と授業をするということはキャリア発達の観点においても効果があったと考える。



③ 中学年での外国語への接続を意識した実践 『Small Talk』の充実 (大東小学校)

学習指導要領の移行期より英語教育の開始時期が早まった。しかし、早めれば英語力が向上するわけではなく、『英語嫌い』になってしまう可能性があり、継続して『英語が好き』と児童が感じられるアプローチが大事だと考えた。学習意欲の維持・向上ができるよう以下の3点に重点をおき、高学年での外国語科への接続を意識した実践に取り組んだ。

- I 学級会や朝の会でのクイズの時間、外国語活動の時間後すぐなどに既習表現にふれる時間をとった。どの子も語彙や表現をよく覚えるようになり活動が活発になったと感じる。
- II 自分事から離れてしまうような疑似体験やごっこ遊びではなく、児童が語彙や表現を使いたくなるような実生活と結び付いたパフォーマンス課題を取り入れた。
- III 児童が自然と使いたくなるような活動『Small Talk』を設定し、毎回活動の中に入れた。既習表現でも英語専科教員によって、トピックを変えて児童を楽しませる工夫がされていたため、学習意欲の向上にもつながった。

3) 共同研究としての取り組み

海南市立教育研究所としての取り組みを進めてきたが、次の4点が不明な部分が多く、尾上先生に指導していただきながらということで共同研究として進める事となった。

- (1) パフォーマンス課題とルーブリックの設定の妥当性
- (2) 評価と在り方
- (3) 「Can-do リスト」や「評価規準表」を作成したが、1年間実践を進めてきて改良の必

要性に迫られている事

(4) アンケート分析方法

令和2年8月の亀川小学校及び令和3年2月中野上小学校での提案授業には、日程が合わず残念ながら尾上先生にお越しいただけなかったが、上記4点について11月27日に大東小学校にお越しいただき、指導助言をいただいた。ここでは、次のように一定の評価をいただきながら、次の研究の方向性を示唆いただいた。

- ・「Can-do リスト」には、5・6年生に共通する目標、それぞれの学年ごとの5領域（聞くこと、読むこと、話すこと（やり取り）、話すこと（発表）、書くこと）の目標、各領域と教科書の各ユニットとの関連が示されている。これらがA3判一枚にまとめられ、それぞれの関係が一目でわかる作りとなっているので、1年間あるいは2年間の学習を見通した授業づくりにおいて非常に有益な資料になると思われる。また、この「Can-do リスト」に加えて「評価規準例」と「かんたん早見表 外国語 評価場面」も作成されていることから、計画的な外国語科の評価の実施と、児童の学習達成度合いの把握が可能であると思われる。
- ・「外国語（英語）」を学ぶということは、理解可能なインプットを児童にたくさん提供する事。「Input なくして言語習得なし」
- ・評価は、知識と技能を分けるとよい。
- ・「Can-do リスト」は教科書会社によってUnit 毎で設定し、児童用に明示しているものが多い。2年間を1つにまとめているのはめずらしい。
- ・授業では、児童が言いたいことを絞り出すアウトプットの機会を提供する事。
- ・「変容するポーランドのコミュニティ」というループリック例（『大学教員のためのループリック評価入門』、2014年、pp. 10-11より）を提示し、その示し方と設定の仕方の留意点を指摘された。
- ・アンケート分析の中で、アンケート自体の母数の違いがあるので、質問項目がおなじだからといって全国調査との数値上の比較は、慎重に行った方がよい。
- ・クロス分析は面白い見方であるが、その抽出するアンケート質問項目が妥当かどうかを検討すべである。

4) 共同研究を振り返って

コロナ禍で研究所のメンバーでリモート会議をするなど令和2年11月からほぼ1年間手探りで悩みながら実践等を重ねてきました。「これで研究として良いのかな。」という不安がありました。そんな中、尾上先生にお越しいただき、相談させていただいたことで、より研究の方向性を明確にすることができました。また、海南市は教科書『NEW HORIZON Elementary English Course』（東京書籍）を使用しているため、その教科書に沿っていかにパフォーマンス課題やループリックを設定するのかという狭い視野で研究を進めていたが、尾上先生から他の市町村の取り組みや他の教科書会社の内容を紹介していただき、視界が広がったような気持ちになりました。本研究は令和3年度11月まで続きます。尾上先生には継続し共同研究としてご指導いただきたいと切望しております。

<参考・引用文献>

- 1) 投野由紀夫 (2013) . 『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』大修館.
- 2) 西岡加名恵・石井英真(2019). 『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価「見方・考え方」をどう育てるか』日本標準.
- 3) Stevens, D.D., & Levi, A. J. (2012) *Introduction to Rubrics: An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning*. Stylus Pbu Llc. [佐藤浩章・井上敏憲・俣野秀典 (訳) (2014) 『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部]